

第 43 回 助産師教育協議会 全国研修会 趣意書

テーマ：技の伝承・つなぐ・キャリアを育む

(平成 30 年 2 月 10 日(土)・11 日(日) 幕張国際研修センター)

第 43 回全国研修会は、助産師教育を受けた後の助産師のキャリア形成に視点を向けてみました。助産師の基礎教育を終え免許を得た後に助産師たちはいかに育つのか、育ち続けるのか、働き続けるのか、助産師の技という視点から、また専門職業人として歩み続けることで経験する困難や歩み続けることを後押しした助産師の魅力とは何かという視点から、そして助産師の基礎教育に関わるものとして俯瞰しておきたい、成長し続けるため求められる技・原動力など助産師の“キャリア形成につなぐ意志ある学びとは何か”を論点に 2 日間の研修を企画しています。

第 1 日目は助産師技術(技)の“伝承・つなぐ”に視点を置きました。

助産師特有の技ともいえる助産技術はエビデンスの元に変化しうるのか、変わらぬ技とより安全より質の高い技術へと変革しうるものなのか、基礎助産師教育に関わる教員として、助産技術の伝承と変革に視点を置いた講演やディスカッションから助産技術の技について考える機会を設けました。パネリストは、神奈川県で長く助産師として活躍されてきた日本助産師会会長の山本詩子先生(基調講演 2)、助産師教育に長年携われてきた熊澤美奈好先生をお招きし、それぞれが考える伝承したい助産師の技、変わりうる助産師の技についてお話し頂きます。

また職人という立場から、宮大工の西澤政男氏(基調講演 1)をお招きし、彦根城など歴史的建造物の修繕経験や抱える弟子などへの技術伝承教育の経験などから、技術の伝承と変革をテーマにお話し頂きます。ディスカッションは、西澤政男氏、山本詩子氏、熊澤美奈好のお 3 人による「技術の伝承と変革」という視点から、立場は違えども現場で遭遇する若者に対する思いと若者である後輩にどのように技を伝承し、または時代の要請に対応した技の変革はいかにあるかなど、それぞれのお考えと共通点などをご討論頂きます。セッションコーディネーターは熊澤美奈好先生にお願いします。

2 日目は助産師の“キャリアを育む”に視点を置くものです。

午前中に企画した“助産師教育卒後のキャリア形成と未来”は、「助産師という仕事を支えた経験と岐路・未来」をテーマに、パネリストとして臨床歴 10 年前後の 4 名の助産師を招き、それぞれがたどっている助産師という仕事と岐路・今後の設計などについて語ってまいります。ディスカッションでは、働き続けたいと思う助産師の魅力、悩んだ岐路と切り開いた原動力と、描く未来像など語って頂き、その中で自分の受けた助産師教育が今の自分にどのような影響をしているのか、などご意見を交わして頂きます。

パネリストとしてお招きする助産師は、助産師養成所を卒業後に病院に勤務する助産師、大学院で助産師教育を受け後に病院を経験の後助産所で働く助産師、助産師養成所を卒業後に病院に勤務、結婚後に現在は非常勤として働く助産師、学部で助産師免許を得た後に病院に勤務・大学院の後に JAIC・国境なき医師団で活動後に国際協力機構でシニア専門として活動する助産師の 4 名です。パネルディスカッションのセッションコーディネーターは現在、依頼中です。

次いで、4 名の助産師の経験や未来、職業人としてどのようなキャリア人生を歩んでいるのかの語りを受けて、まとめとして「将来のキャリア形成につなぐ意志ある学びを実現するために」をテーマに、シンクタンク未来教育ビジョン 代表 鈴木敏恵氏(教育講演)から教員に向けてお話を頂きます。鈴木氏は新しい時代、求められるのは…自分の目で見て自分の頭で考え、自ら獲得した知識やスキルを現実に活用できる力であり、真実を希求する姿勢、自らのふるまいを俯瞰しつつ謙虚に学び続けるしなやかさ、自分の他者も大切にできる感性、知(情報)を見極め獲得し、他者と知を共有しつつ新しい知の創造ができる人。与えられた学びから意志ある学びへ、知性と感性が研ぎすまされ、明日へ前向きな気持ちが湧き上がる未来教育について、4 名の助産師の経験を受けて教員にメッセージを発

信頂きます。

他に2つの企画を計画しています。

1つは、ワークショップ「子宮頸がん検診における検査を助産師教育に取り入れるために」です。全助教で「昨年4月に、子宮がん検診は看護師が診療補助業務として行うことが可能である、という閣議決定を受けて、助産師教育に携わる教員の皆様に検診の機会を提供し、将来的には、助産師教育の中に子宮頸がん検査の知識と技術を取り入れていくこと」が目標とされ、全国各地区での研修会が推進されているため、これを受け全国研修会でも子宮頸がん検査の実際についてワークショップを設けました。本研修会では、埼玉医科大学川越総合医療センターの長井智則先生より、子宮頸がんの理解、検診結果の見方、検体採取部位・方法の違いによる検査結果への影響等についてご講演頂く予定です。さらに人数は限定(30人程度)しますが、長井先生他によるご指導のもと検体採取の演習を予定しております。

もう1つは、シンポジウム「助産師教育における硬膜外麻酔分娩を考える」です。

硬膜外麻酔分娩(いわゆる「無痛分娩」)を巡って、今春、母子の死亡を含む2011年以降の計7件の深刻な事故が発覚した。また厚生労働省研究班(主任研究者・池田智明三重大教授)も、2010年から2016年4月までに報告された298人の妊産婦死亡例を分析した結果、「無痛分娩」を行っていた死亡例が13人(4%)あったことから、医療機関に対し、急変時に対応できる十分な体制を整えた上で実施するよう求める緊急提言を発表しています。

これらを受け、安全対策を検討する厚生労働省研究班(代表者・海野信也北里大学病院長)が8月23日から開始され、会議では、あいついだ事故報告を受けて行われた日本産婦人科医会による実態調査の最新結果が報告されました。今回の調査は今年6月、出産を扱う約2400医療機関を対象に行い、8月時点で回答率は約60%でした。回答した医療機関で昨年度、行われた出産のうち「無痛分娩」は6.1%であり、その53%は診療所で行われており、病院は47%でした。日本産科麻酔学会が公表している2007年度厚生労働省研究助成調査結果によると、全分娩のうち、硬膜外無痛分娩を行った妊産婦の割合は2.6%と報告されているから、この10年間で「無痛分娩」は約2.4倍に急増していたこととなります。しかし、半数以上が診療所で行われていることは、安全体制が確保されているのか憂慮されています。

助産師は「自然性を尊重し、自然な経膣分娩を介助する」(助産師の声明)専門職であるが、このような分娩の状況の中で、助産師教育において硬膜外麻酔分娩(いわゆる「無痛分娩」)をどのように位置づけ、どのような教育を行っていくべきなのか、論議が必要と考えられます。そこで本シンポジウムでは以下の立場から、それぞれの視点で課題を述べて頂き、論点を整理していくことを狙いとする。産婦人科医の立場から、埼玉医大川越総合医療センター麻酔科教授の照井克生先生には講演とパネリストとして、臨床助産師の立場から1名、ジャーナリストとして女性と助産師の立場の両方から見えてくる課題として河合蘭さん、助産学教員の立場からアメリカでの硬膜外麻酔分娩の経験も踏まえて大石時子先生、以上の4名の先生方によるそれぞれのお立場からみえてくる課題について討論を頂きます。